

武藏野日曜聖書講筵

## マルタとマリヤ

——ルカ伝第10章38～42節——

1979年10月14日

小池辰雄

心いりみだれ 無くてならぬもの 体受・信交・信入・祈入 感激性・感受性 靈素 万法帰

## 【ルカ10・38～42】

<sup>38</sup>かくて彼ら進みゆく間に、イエス或<sup>ある</sup>村に入り給えば、マルタと名づくる女おのが家に迎え入る。<sup>39</sup>その姉妹にマリヤという者ありて、イエスの足下に坐し、御言を聴きおりしが、<sup>40</sup>マルタ饗応のこと多くして心いりみだれ、御許に進みよりて言う『主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思い給わぬか、彼に命じて我を助けしめ給え』<sup>41</sup>主、答えて言い給う『マルタよ、マルタよ、汝さまさまの事により、思い煩いて心労す。<sup>42</sup>されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ、マリヤは善きかたを選びたり。此は彼より奪うべからざるものなり』

## ●心いりみだれ

この「マルタとマリヤ」のお話はもちろん前にもいたしましたが、今日また新しくやりますといいます。この話はルカ伝にしかないわけです。他の福音書に出てこない。ルカ伝は例の「善きサマリヤ人」のあとに出てくるお話です。ヨハネ伝の11章、12章にマルタとマリヤのことが出でますが、こういう話ではない。ラザロの復活のことです。

<sup>38</sup>かくて彼ら進みゆく間に、イエス或<sup>ある</sup>村に入り給えば、マルタと名づくる女おのが家に迎え入る。<sup>39</sup>その姉妹にマリヤという者ありて、イエスの足下に坐し、御言を聴きおりしが、<sup>40</sup>マルタ饗応のこと多くして心いりみだれ、御許に進みよりて言う『主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思い給わぬか、彼に命じて我を助けしめ給え』<sup>41</sup>主、答えて言い給う『マルタよ、マルタよ、汝さまさまの事により、思い煩いて心労す。<sup>42</sup>されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ、マリヤは善きかたを選びたり。此は彼より奪うべからざるものなり』

皆さん、ご承知のとおりのところです。「ある村」というのは、ベニヤと大体されてい



るわけですが、エルサレムの南東の方にあります。この村によく滞在して、最後の十字架にかかる前におられたわけです。このマルタとマリヤの所にはよく訪ねられた。ヨハネ伝をみると、ヨハネ伝11章のところに、

「<sup>1</sup>愛に病める者あり、ラザロと云う、マリヤとその姉妹マルタとの村ベタニヤの人なり。……<sup>3</sup>姉妹ら人をイエスに遣して『主よ、視よ、なんじの愛し給うもの病めり』と言わしむ。……<sup>5</sup>イエスはマルタと、その姉妹と、ラザロとを愛し給えり。」（ヨハネ11・1～5）

と書いてある。キリストは特にこの兄弟姉妹を愛しておられた。5節に

「イエスはマルタと、その姉妹と、ラザロとを愛し給えり」とはつきり書いてある。この「愛する」という字がやはり、「アガパオー」という字が使つてあります。この「愛する」というのは天的な愛のことです。マルタの方がお姉さんだつたらしい。今読んだところにも、マルタはすぐいろんなことを考えて、もてなそうとしたわけです。ヨハネ伝の方をみましても、マルタの方がどうもそういうことです。例えば、もう少しあとの方をみますと、

「<sup>18</sup>ベタニヤはエルサレムに近くして、二十五丁ばかりの距離なるが、これはギリシア語だと「十三スタディアム」という。

<sup>19</sup>数多のユダヤ人、マルタとマリヤとをその兄弟の事につき慰めんとて来れり。<sup>20</sup>マルタはイエス來給うと聞きて出で迎えたれど、

すぐ出かけて行つたわけです。

マリヤはなお家に坐し居たり。」（ヨハネ11・18～20）

そういうところをみても、マリヤの方はじつとしている。マルタの方はすぐ動きだす。そういう性格の違いがここにも出てているわけです。そして、マルタがキリストと問答しているところがそこにあります。

<sup>39</sup>その姉妹にマリヤという者ありて、イエスの足下に坐し、御言を聞きおりしが、

こちらも、マリヤの方は、「イエスの足下に坐し、御言を聞きおり」という。キリストも立つていたか坐っていたか知りませんが。キリストがそこで話をされる。そうするともう、他の事を顧みないで、マリヤはじつと聞いていた。

<sup>40</sup>マルタ饗応のこと多くして心いりみだれ、

マルタは饗宴のことを、おもてなししようというわけで、「心いりみだれ」というのは、大いにせわしい心でということです。

「御許に進みよりて言う『主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思い給わぬか、』

「働くかせる」という言葉は「デイアコニッセ」という、「奉仕する」ような意味の「仕える」



という意味です。

### 彼に命じて我を助けしめ給え』

と。マルタは心が分裂しているわけです。一生懸命で自分でやつていればいい。ところが、

「マリヤは何もしていないので、どうかそういうように言つてください」

なんてなことを言つてているところが、マルタの働きぶりが、多少、気持が分裂している。

### ●無くてならぬもの

<sup>41</sup>主、答えて言い給う『マルタよ、マルタよ、汝さまさまの事により、思  
こころづかい  
煩いて心労す。

心を配つて、氣を使つていると。それは悪くはないんだけれども、しかし、

<sup>42</sup>されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ、マリヤは善きかたを選  
びたり。此は彼より奪うべからざるものなり』

と。これはこの場合に、マルタよりもマリヤがもちろん大事な一点をしつかりとつかまえ  
ているといことで、正直、

「無くてならないものは唯だ一つ」

と。ということは、本ものをしつかり聴くということです。

このことは、我々、今の教育のことを思いましても、小学校からすぐ、  
「お前はどう思うか？」

とか、小学校の頃からあまりに社会的な意識が強すぎる。昔はまた、なきすぎたと言える  
かもしれませんけれども。横の関係ですね。横の関係に働く。社会やクラスのこと、また  
選挙だとか、いろいろなことが小学校のときから訓練される。悪くはないけれども。先生  
の言うことをしつかり聞くということ。まず思うよりも先に――

「よく学びよく遊べ」

と言うが――よく聞くこと。教室でしつかり聞いて、もうそこでしつかり身につけてしま  
うくらいな気持で、全身を目とし全身を耳として聞くようなそういういた態度。それがだい  
ぶ欠けてきているのではないかと思います。

「朝に道を聞かなば夕に死すとも可なり」

という。天野先生の大好きな論語の句ですが。朝に道を聞いたらば夕に死んでもいいと。  
この場合の「聞く」というのは本当に聞き入れること、聞いて身につけることです。ただ  
聞いただけではダメだ。朝に本当に道を聞いて、自分が道となってしまっている。道を聞  
いて道となるような聞きかたが本当の聞きかたです。道人だね。道の人となる。そうすれば、  
もういつ死んでもいい。

「朝に道を聞かなば夕に死すとも可なり」というのは、聞いたらあとは何もしなくてもい  
いというわけではない。道を聞けば、もう道の人になつていてるから、いつ仆れてもいいんだと。



たとえ何も出来なかつたとしても差し支えない。そういう聞きかたです。

日曜の集会が、そのような意味において、私も語りながら、神さまに聞いているわけです。皆さんも同じことです。語るも聞くも同じこと。聖徳太子がそれと似たようなことを言つてます。

そういう、道を聞く、キリストを聞く。だから、聖書を読むことも、その御言を実は聞いているわけです。目で聞いているわけです。目で読んで、実は活ける言葉を、キリストの現実に入つて——私が「ドラマ」だと言つてるのはそのことです——ドラマの中に入つて、自分がマルタとなりマリヤとなつて、この箇所にぶつかつていて。今、現実にキリストにぶつかつてているマリヤでありマルタである。こういうことです。それが「ドラマ」ということ。即ち、本当に読むことが直ちに二千年前の現実を今として聞いていること。これが

### 「聖書を読む」

ということです。今、見ることがたくさんあるけれども、その意味においては、文字において聖書を見ていくくてはいかん。キリストを見ていなくてはいかん。文字をとおしてキリストの声を聞き、キリストに接している。これが本当に読むということです。そういうことになれば、

### 「朝に聖書を読めば夕に死ぬとも可なり」

ということになる。それをマリヤはやつていたわけだ。

「もうこれは掛け替えのないひとだ。これに本当に聴かなくては」といつて動かない。片一方は、先生が来たからいろいろおもてなしをしようとして、

### 「あんたもしたらいじやないか、と言つてくださいよ」

というわけだ。これもマルタは、マリヤがやらなくとも、自分でもつて一切をやつていれば、そのやり方はその聞くと同じことになる。その奉仕は、その行は——片一方は聞——そういうような行動をしていれば、マルタも立派なんで、キリストは甲乙をつけなくともよかつたはずです。ところが、マルタが、

### 「マリヤにやらせてくださいよ」

なんて言つてはいるところに、ちょっとこれがマイナスになつてしまつた。

## ●体受・信交・信入・祈入

とにかく、聞くことが大事です。別な言葉でいうと、受けとることです。  
 「体受」、体<sup>からだ</sup>で受けとる。聞くこともただ耳で聞いているのではない。全身で受けとつていることです。信仰も大事なのは、「信じ仰ぐ」のではない。「信交」、信じ交わる。体で受けとる。これはまた「信入」するわけです。信じ入る。聞くことは何かというと実は、祈り入ること、「祈入」なんです。信入、祈入、これはみんな同じです。



「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見いださん。叩けよ、さらば開かれん」

という言葉があるものだから、何かこちら側からの求め、尋ねというものに一生懸命になろうとする。これまたキリストの言葉に躊躇く。結構ですよ、それは。結構なんだけれども。信仰の質たちがそういう質になつてくると疲れます。

「まだ私は求め方が足りない。まだ私は信じ方が足りない。まだ私は読み方が足りない」

と、しょっちゅう自分の方を見ている。

そうでなくて、いつも申し上げているとおり、キリスト教は、聖書の宗教は上から来ているんだからね。イスラエルの民を救おうと思つて、モーセに呼びかかつてきたのはヤーヴェーの神さまです。

「我くだりて」

と書いてある。上から臨んでくる。上から臨んでくるものを受けとる。聖書の宗教は「降臨」なんです。上から臨んでくる。これを受けとる、これを聞く、これを見る。これにつかまる。これに捕まえられる。この角度が本ものにならない限り、いつまでたつても、信仰は本ものにならない。

こちら側のいわゆる迫りで、

「ワッショイ、ワッショイ」

と祈つてみたりね。たまには嵐のような祈りもいいけれども、それはもつと凄い上からの嵐を受けとることなら。そうでなくて、嵐をこちら側からかき起こして何のかんのと、そうじやないです。

そうするとまた、キリストはルカ伝18章で、

「しつこく求めなければ、祈らなければいかん」

というようなことを仰るものだから、さあ大変だということで——人間の側の熱心が悪いと言うわけじゃないけれども——人間の側の熱心だけだつたら、ヘタすると今度はパリサイになる。

「俺の信仰は」

というようなことになる。たかが知れているんですけど、こっち側の熱心なんてものは。

「汝の熱心、これを為したもう」

とイザヤ書に書いてある。神さまの熱心、神さまの光、神さまの声、これを受けとるのだから、こんな楽なことはないですよ。バカになつていればいい。開け放していればいい。正に「そのまま」なんです。しかし、ただそのままでいいのではない。そのままの姿で受けとると、そのままがそのままになくなつてくるんです、今度は。変質変貌させられていく。だから、「道を聞く」とは、「道と成る」ことになるんですけど、直ちに。聞くことが成るんです。



こういうことはもう、頭の問題じゃない。頭でどう思うこう思うではないですよ。無限無量なものが展開してきますから、内容はもう限りない。

### ● 感激性・感受性

そういう受けとりかた。勉強だつてそうなんだ。本を読んでいて、そこからグングン吸い込んでいくような。上からの迫りを受けとる。こっちの頭をひねつて、「何とかして解釈しよう、覚えよう」

ではなくて、迫りがくるから、覚えさせられてしまう。ということは、内容に感激するわけです。もう感激性がなくなつたら、感受性がなくなつたら、おしまいですよ。感受、これも「受けとる」だ。ゲーテが

「情感は一切である」(ゲフュール イスト アッレス)

と言つたのは、その意味なんです。全身が情感となつて——ドイツ語の「フュール」というのはもともと「触る」という字で触覚的な言葉です——全存在でもつてこれを受けとるのが本当の「ゲフュール」です。ただの「感情」というものではない。頭で「神はあるか、ないか」

ではないですよ。神にぶつかって、

「もう、たまらん。在るも無いもヘッタレもない」

という、それが本当に感じ、受けとつてていることなんです。

「宗教は体験である」

というのはそのことです。体験宗教。議論はいらん。

マリヤというのは、そういう角度で聞いていた。そうすると、体受すると、

「わが言は靈なり生命なり」

という、靈と生命が入つてくる。靈生が入つてくる。言葉を通して即、靈生が入つてくる。靈生が入つてくると今度は、動かざるを得ないんです。マリヤはマルタと成らざるを得ない。マリヤがマリヤでおしまいだつたら、このマリヤはまたダメです。

「こう書いてあるから、しおつちゅうこれは聞いていればいいな。何もしなくてもいい」

なんて、そうじやない。マリヤとマルタが一つとなつてしまふ。真のマリヤとなれば、眞のマルタとなる。眞のマルタの奥には眞のマリヤありと、こういうことです。だから、それが静動一如ということ。静かにして聞いていることと動くことが一如の姿である。そういう、ざるを得ないんです。

それは、聞くことが同時に祈り入つていて、自分を投げ入れていてことですから。投げ入れて体で聞いているから。これは力がくるから動かざるを得ない。

「言うは易く行うは難し」



ではないんですよ。動かなければ、この静は本当の動かない静になつてしまふ。本当の静は必ず動である。本当の動の奥にはちゃんと素晴らしい静がある。だから、疲れない。

水泳でもそうですよ。ストロークでグッととかくでしょ。その次は、全身を水にまかせるんです。そうすると休らう。これは静の世界。静動の交代です。それを、頭をあげて頑張つてやつていたら、たちまちくたびれてしまう。みんな静動、呼吸です。それが本当に呼吸を知つているということです。勉強でも何でもそうです。

マルタとマリヤをただ比較したり、どちらがいいの悪いのと、そんな問題ではないので、この話の奥はそこに来るわけです。そして、本当のマリヤ、本当のマルタとなる。

中世の言葉に、

「ヴィア コンテムプラティーバ」（瞑想の道）

という言葉と、

「ヴィア アクティーバ」（行動の道）

という言葉がある。「瞑想の道」と「行動の道」です。ことにカトリックでは瞑想の世界を重んずる。祈り瞑想する。ダンテの『神曲』で上方にいるのは瞑想の魂です。この瞑想というのは、私に言わせれば、祈りの境地です。ただ自分の側の瞑想ではない。それから、行動。これは、二つに分けているけれども、本当は分けてはいかん。これは一つなんだ。本当の瞑想的な祈りに入れば今度は、また行動になる。

「ラボラーレ イスト オラーレ」（労働は即ち祈りなり）

という。働くことが祈りであるということは、祈り心の働きでなければ本当の働きではない。だからもう、宗教においては何といつても、アルファにしてオメガなるものはこの祈りなんです。ただ口の祈りではないです。祈り心です。

ということは、キリストの中に自分を投げ入れる態勢。その場は一如である。その一如はいかにして可能か。申し上げているとおり、十字架で自分というものは投げ出されたものですから。いわゆる自我がない。贖われてしまつているんだ。だから、キリストの中に入らざるを得ない。そこはもう聖靈の世界だ。自分をキリストの中に入れざるを得ない。

「私は門なり」

と言うから、入つて行つたらいい。十字架の門だから。そうしたらばもう…（異言）…、何とも言えないです。その中に入つてしまふ。

私は机に向かっていても、少し読んでくたびれると、瞑想してその中に入る。すると力が来る。この靈的生命ほど素晴らしいものはない。世の中にはいろいろなお薬がありますけれどもね、ダメです。

## ● 靈素

フランスとイスパニアの国境にルルドの泉というのがある。あれは宗教的なある一つの



示しで乙女に与えられた。青森にもルルドの泉と同じような不思議な泉がある。この水は腐らない。それはある一つの不思議な元素がその中に含まれている。それは人間の体内の酸素を非常に強くする。一切の病気は酸素の欠乏からくるそうだね。その酸素を強くするから、それで治つてくるんです。ルルドの水というのは、そういう不思議な要素をもつてゐる。そのような不思議な元素がある。

それよりもまたもうひとつ不思議なのが、この靈素です。聖靈という靈素。これは万人が——どこにも行く必要もない。どの水を汲む必要もない——万人が受けられる。キリストが最も深く靈素を持つていた。だから、あんな凄いことになつた。死んでも死なない生命。永遠の生命は、キリストがもつていた靈素だ。このキリストがもつていた靈素は聖靈ですから。それが臨んできたから今度は、ペテロもパウロもヨハネもえらいことになつた。「唯だ一つのこと」とはこのことです。

「無くてならぬものは唯だ一つ」

というのは、私はキリストのこの言葉を今度はそこへ持つていく。無くてならないものはこの一つ、この靈素を受けとること。聖靈のバプテスマだ。今の普通のキリスト教会がこれを受けとらないから、いつまでたつても始まらない。

それがさつき言つた、全身をもつて祈り受けとつていくこと。十字架の門を通つていけば、この靈素がくる。こんなありがたいことを、なぜ、みんないい加減にしているか。私も無教会時代は、長いこといい加減にしていた。

来年は内村先生と藤井先生の召天五十周年になる。もう去つてから50年半世紀。私は記念の本を書くつもりだ。記念と言つたつて、先生方をただ記念するのではない。無教会はここを突破しなければダメだということです。ただ「無教会主義」なんて、何をぬかすかといふんだ——何でも録音されるから困る——私は悪口を言うから。だから、私は誤解される。躊躇の石だから。けれども、それは仕方がない。真理だから。聞く方はすぐ相対的な角度から聞くから、それで、なんのかんのと言う。まあ、なんのかんの言われてもいいよ。この靈素、これは元素中の元素です。絶対次元の元素。これがきたら、もういい。どんなことになつても大丈夫です。これを限りなく受けとつていくこと。使徒たちのような具合にね。私はまだ使徒たちにかなわないから、大いに使徒たちの次元に、同次元にいよいよ入つて行こうと、こういうわけです。

一切のものがここに帰する。その靈素の質は何か。それは言うまでもなく愛です。相手を救いあげることのできる愛です。靈素は、威張つてゐるのではない。これは相手を救いあげる、担いあげてしまう。万法はこの靈素という愛に帰します。万法帰愛とでも言つた。私は至言だと思つたから、大いに賛意を表した。手島さんという人間はいろいろな角度をもつた人だから、いろんなことを言われる。けれども、彼が捕まえられたものは確かに大事な



ものがあつた。この聖靈の愛です。愛の靈です。キリストは正にこの聖靈の愛の、愛の靈の権化であつた。だから、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書を見てごらん。その烈しい言葉も行為も全部これは、燃えるような愛の展開なんです。彼は怒つても、その怒りの中にも凄い愛がある。

## ●万法帰一

今度は、

「リーベ イスト アッレス」（愛は一切である）

です。ゲーテという人もそういう愛の大きな角度から彼の文学が展開していく。ゲーテの文学が凄いのはそういうことです。

「万法一に帰す。一いずれのところに帰するか」

という言葉がある。その時に愛と言わない。あるいは、仁とも言わない。慈悲とも言わない。具体的なある一つのことがらを言う。どのようなことでもいい。雑巾掛けをすることであろうと、何をすることであろうと。そこに万法は帰しているという。一人の人が或る事に全身を傾けてやるところに、そこにすべての法則は帰する。そういうふた具体的な歩きかたをしろ。理屈を言っているのではないぞと。その質は、究極においては、人助けのことです。そこにおいて人助けとも思わない。神の榮光が自然に現れている。おのずから現れている。「喉の渴いている者に一杯の水をやるのは、それは私にやつたんだよ」とキリストは言つた。あのマタイ伝の25章の終りの方に、

「<sup>31</sup>人の子その榮光をもて、もうもろの御使を率<sup>ひき</sup>いたる時、その榮光の座位に坐せん。<sup>32</sup>斯て、その前にもうもろの国人あつめられん、之を別<sup>わか</sup>つこと牧羊者が羊と山羊とを別つ如くして、<sup>33</sup>羊をその右に、山羊をその左におかん。<sup>34</sup>爰に王その右におる者どもに言わん「わが父に祝せられたる者よ、來りて世の創<sup>はじめ</sup>」より汝等のために備えられたる国を嗣<sup>つ</sup>げ。<sup>35</sup>なんじら我が飢えしどきに食わせ、渴きしどきに<sup>とぶら</sup>訪<sup>ひ</sup>い、獄<sup>ひとや</sup>に在りしときに來りたればなり」<sup>36</sup>爰に正しき者ら答えて言わん「主よ、何時なんじの飢えしを見て食わせ、渴きしを見て飲ませし。<sup>38</sup>何時なんじの旅人なりしを見て宿らせ、裸なりしを見て衣せし。<sup>39</sup>何時なんじの病み、また獄に在りしを見て、汝にいたりし」<sup>40</sup>王こたえて言わん「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと小さき者の一人になしたるは、即ち我に為したるなり」（マタイ25・31～40）

これが、万法帰一するというところなんです。全部、愛の行為でしょ。これが一に帰する。マルタとマリヤは全く一つであるということが分かつたでしょ。マリヤ的土台においてマルタ的花が咲く、果が実る。



人を動かすものは言葉ではない。行為なんです。その行為が本ものであることは、そのような本ものを受けとつたところにある。そうでなければ、その行為は偽りになる。偽善になる。人に誉められんがために、報いを受けんがために、みんな「何かのため」になつてしまふ。それは本当はためにならない。もうそなつたら、人生の失敗も成功もありはしない。どのような道を通つても、それ自体が神のものです。人の毀譽褒貶なんか問題でなくなる。楽しいよ。たつた38節から42節まで、たつた数節だけれどもね、限りない真理が隠されている。キリストの中に沈潜すると、力が入つてくるから。祈りということは、キリストを愛すること、キリストの愛を受けとることですから。要するに、祈ることも何でも全部、その愛が中心になつてゐるわけです。沈潜の愛が活動の愛に変わつていく。そしてまた、還つていく。もう、静動自由自在。

何と言うかね、私はこの頃、楽でしようがない。すぐ力が来てしまうから。いわゆる信仰なんて言う必要がないものだからね。そういつた「一如」というようなことを言うと、プロテstantの人はすぐ、

「そんな神秘主義は」

なんて言う。神秘主義ではないんだよ、これは。これが本当の聖書の現実なんです。預言者も使徒たちも、いわんやキリストはみんな神との一如の世界に生きていた。自分を投げ出していた、神の中に、キリストの中に。

「自分の信仰」なんて問題にして、「汝と我」なんて、しょつちゅう対立ばかりやつている。「信仰によつて義とされる」

なんて命題ばっかり信じてゐる。だから、観念信仰だと言う。

「われ汝のうちに、汝わがうちに」

と、パウロがきんざん言つてゐるではないですか。キリストは、ヨハネ伝14章あたりから、「私はお前たちと一つだぞ」

ということをきんざん言つてゐるではないですか。

「わがうちに居れ。われ汝のうちに居らん」

と言う。「宿る」とか、「居る」とか、みんなこれは一如の世界です。なぜ、それを遠慮しているんですか。

「私は罪びとですから」

なんて。

「その罪びと私は一つになろう」

と言うんだ、キリストの方は。キリストの本願なんだから、遠慮することはない。なぜ、遠慮したり、考へてゐるか。分析して考へてばっかりしてゐる。ダメだよ、それでは。

